都の空

発行所
都の空事務局
東京都台東区東上野１－２４－４
丸千第二ビル２Ｆ
浅野修一事務所内
ＴＥＬ０３－３８３５－２２３３
ＦＡＸ０３－３８３２－７１７５

東京都立第三商業高等学校
創立80周年記念式典 祝賀会

平成20年1月17日（ティアラ江東にて）

東雲

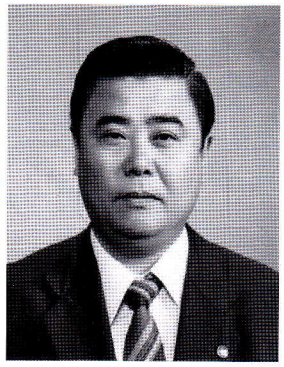
米国のサプライムローンに端を発した世界経済は百年に一度といわれるピンチに見舞われている。資本主義の総本山ともいうべき米国経済の破綻は、それに依存してきた世界の各国経済を動揺、破綻させ出口の見えない暗闇の谷底をさまよっているといっても過言ではあるまい。世界の株式市況はニューヨークダウに象徴される如くジェットコースター相場を繰り返しつつ、暴落に暴落を繰り返している。

資本主義の欠点として、生産の無政府性などが指摘されてきたが、生産だけでなく巨額マネーファンドの暴走―空売り、空買いをふくまらせたようなものである―が数知れない投資ファンドが創られ、実体経済の四倍程度にもふくらんでいるという。サブプライムローンを組み入れた高利回りの投資ファンドに人気が集まり、我が国をはじめ多くの国や投資家が被害を被ったのである。

米国経済は、住宅産業、自動車産業等死屍累々で世界経済に与えた影響も計り知れないものがある。問題は、この世界的な不況をどう乗り切るかである。経済はグローバル化しており、一国で対応できる問題でないということから始めなければならない。各国の政治、経済のシステムは、資本主義、社会主義、共産主義等多様であるが、共通項を整理し、世界経済の持続的で安定的な対策を講じなければならない。食料やオイルに対するファンドは禁止するとか、戦争による経済復興はしてはならないとかは最低限度の国際公約にしなければならないと思う。

会長就任 ごあいさつ

増田昌弘
第十九期　昭和二十七年卒



東京都立第三商業高等学校出身の公認会計士、税理士が結集し三商会計人会を設立し、平成四年十月五日に上野の東天紅に於いて設立総会を開催した。設立に際して大変ご努力をいただいた故宮川隆一先生から毎日早朝お電話をいただき、目覚まし時計がいらないくらい毎朝起こされたこと、また設立総会の時、司会をされたことを懐かしく思い出している。

以前から好川会長の後の会長を引き受けるよう要請を受けていたのですが、「その任にあらず」とお断りをしてきたわけですが今年の五月に事務局として大変ご苦労をいただいております荻野弘康会員から「なんとしても会長を引き受けてくれ」と要請を受けた。荻野弘康会員には税理士会で私が日税連の商対委員長を仰せ付かった時も副委員長をお願いしたり、その他税理士会のいろいろなことをおねがいばかりしてきましたので、無げにお断りもできず、若手にバトンタッチをする繋ぎ役としてということで、平成二十年六月十八日開催された総会で会長に就任することとなりましたした。

私は好川初代会長が推進してきた母校である都立三商の会計学研修のお役に立つ事業を今後共推進し、都立三商の発展に微力ではありますが貢献していきたいと存じおりますし、また母校出身の公認会計士、税理士が相集って親睦を深め、そして会報「都の空」等を通して情報を交換し、公認会計士制度、税理士制度をより一層良い制度にしていく一助となればと考えております。

私は微力で好川初代会長のようにはいきませんが、事務局を担当していただいております。浅野修一、荻野弘康、石川昭会員はじめ多くの会員諸兄のご協力をいただき、三商会計人会のより一層の発展に努力する所存でございますので、よろしくご指導、ご鞭撻のほどお願い申し上げます。

北京の太陽

帆足誠
第十期　昭和十七年卒

この夏北京オリンピック関連で頻繁に北京の街がＴＶ画面に映し出された。強引な交通規制でスモッグ状態が可成り改善されたとは言うものの、過ぎし六十三年前の八月十五日の灼熱の太陽とは比すべくもない。当時私は中国・北京の城の北辺にあった派遣軍通信学校に在学中であった。

昭和六年旧満州國営口市の唯一の日本人学校であった営口尋常小学校に入学したその年に満州事変が勃発、同十二年四月東京府立第三商業へ入学した年には日支事変、そして繰り上げ卒業した十六年十二月には大東亜戦争が開戦。十七年一橋大学に入学し、十九年徴兵検査を受け兵役に服した。中国山西省の首都太原にあった電信九連隊に入ったのは十九年秋だった三か月の初年兵教育、さらに三か月の幹部教育ののち甲種、乙種に分かれて、甲種は北京（派遣軍）、新京（関東軍）の通信学校へ。終戦をむかえたのはこの北京在学中のことだった。

当時の北京・天津近辺の治安状況は日本軍に拠るところ大で、（共産）八路軍が跋扈し、時の正統政府であった蔣介石率いる国民政府軍は九月になってようやく米軍輸送機により到着した。武器接収が行われ、彼等は北京城内外の警備の任に就いたが、ほどなく八路軍に撃破され、北京市民の要望により再び日本軍が警備にあたった。また通信線が各所で切断されたため、十月初頭より軍の作戦命令で天津から済南にいたる鉄道路線沿いの通信確保のため、有蓋貨車に寝泊まりしながら保線作業に従事した。翌二十一年一月には幸いにして復員船で天津から佐世保へ帰国することが出来た。

翻って自分の四半世紀を思うと、それはまさに軍国日本の縮図でもあった。満州事変当時の営口では匪賊、馬賊の跋扈はなはだしい時節で、当時の英国の営口では領事の親戚令嬢が馬賊に拉致されるほど治安が乱れ、寮河に帝国海軍の軽巡洋艦が邦人救出目的のため来航して艦砲射撃を行い、また陸戦隊の兵士が市内警備にあたった。私も子供ながら寝るときは樫の木剣を枕元においていたことが鮮明に思い出される。三商、一ツ橋時代は軍事教練に励み、軍隊にあっては太原での極寒冷下二十度の極限状態で、病後の体力回復が幾許か否応なく試された。私にとって大変な幸福は甲種幹部候補生として通信学校へ派遣される際、、北京新京、択一で北京を希望し、同地の通信学校行きが決まったことだ。新京は小学校入学間もないころ親に連れられて見物に行ったことがあるので、いまだ見ぬ北京を選んだのだ。復員後、数年に及ぶ辛酸の抑留を経て帰国した先輩・同輩と語らう都度、もしあのとき新京へ行っていたら私の人生もまったく違っていたものと感謝している。

二十二年一ツ橋卒業後は繊維輸出を主にとする貿易会社に入社し、経理部門に配属された。海外支店閉鎖にともなう引揚社員が多いため政府間貿易の取引では社員の給料もまかなえず、やむを得ず第二会社を作り、もっぱら闇取引で稼いでいたが、国税庁の査察を受け、正味一年その対応に没頭した。在籍五年で退社し、先輩知己をたずね就職活動をしたが、条件面でなかなか意にかなわず、やむなく失業保険を貰いながら新設まもない公認会計士二次試験及び税理士試験を受験することになった。幸いにして合格し、以来三商及び一ツ橋の入学年次・卒業年次を同じくする多くの友人の援助・協力を得て今日にいたった次第で、常日頃心から感謝している次第です。

つい先頃のテレビで六十数年前の東京大空襲を見るにつけても、内地にいた人々も大変な犠牲を強いられたと、しみじみ身の幸運を謝し、茲二十年ほどは欠かさず元旦の成田詣り、毎週の自宅近辺の武蔵野稲荷神社詣で、また事務所近辺の東京大神宮、靖国神社詣りに精をだしている今日この頃です。

「大恐慌の再来はない」
パニック報道の倫理感を疑う

同窓会会長
柴崎晴雄
二五期　昭和三十三年卒

一　初秋の「金融危機」報道サプライズ

リーマンブラザーズ証券の破綻が起因となり、世界同時株安が勃発した去る九月二九日のメディアの報道に万人が蒼白となったこの日、笑いが絶えない日本人が四人いた。周知の通りノーベル賞受賞を勝ち得た日本人四氏である。この朗報も忽ち揉み消された。

「金融危機」とは久しく聞き及ばない活字が紙面に踊っていた。これらの執拗な報道に誤りはなかったか。リーマン破綻の予兆は私なりに二年前から察していた。この僅か一年余の間に景況が様変わりしたことは予期せぬ出来事であったが、兜町の予言者石井久氏（立花証券相談役）は、一昨年十二月二〇日の日経紙に、「この活況相場は二年位しかもたぬのでは？なぜなら日本政府の借金八百兆円と人口減少が問題だ。それと消費税率アップが具体化してくれば相場の活況は終わる」と、『私の市場論』で語っていた。

私がこの六月に退職したコンサル業務勤務の在職中、リーマン社との請負契約書（英文ライセンス契約）の翻訳を担当、同社へ英会話のスキルを持つ日本人社員の採用（会話レヴェルチェック）と出向派遣まで任されていた。この時すでに同社のメンテナンス（警備）代金の入金が滞り始め、契約内容もよく理解せずサインした営業担当者にはそれとなく未収金の有無を調べて滞りがあるのを確認した後、早期回収を促しておいた。

結果として、不採算を事由に契約条項を盾として合意解約に持込んだ。同社は「六本木ヒルズ」のテナントであったから、ビルオーナー（森ビル）の賃料も未払いであったに違いない。同ビルテナントには破綻した悪名高きライブドア社や村上ファンドもいた。イメージダウンを懸念したヤフー社（これも私の担当物件）はいち早く竣工直後の「東京ミッドタウン」へ移転した。

「金融危機」に話を戻すが、このたびは、「スターリン暴落」とか「ニクソンショック」とか「石油パニック」等のように「リーマンショック」と兜町では呼称することとなった（十月二九日現在）。有力企業の大半が九月三十日（中間決算日）の歴史的な世界同時株安により、所有有価証券の安値を被むれば決算対策に直撃を受ける。時価会計の見直し論までになったが、このことは貴会計人会の多数専門家の皆様のテリトリーゆえ、私は門外漢であるのでノーコメントである。

二　昭和恐慌は天災かつ人災がもたらしたもの

一方で、実体経済の早期回復は見込めないものの、歴史は市況の循環で神武景気、バブル崩壊と悪性インフレ、その後の超長期に及ぶいざなぎ景気と、一定のサイクルで歴史が繰返されてきた。このたびもメディア報道が冷静さを欠き、「経済恐慌」とか「資本注入」「金融工学（金融派生商品を複雑に証券化して売りばら撒く枠組み造り）」、「投資銀行（クレジットカード会社）」などの用語を図らずも学習した。さらに某生命保険会社が破綻（旧東邦生命に同じく放漫経営かも？）したことに起因し、いみじくも一国の指導者が「一九二九年以来の経済恐慌の再来と軽口に述べたことでさらに蒼白となった。

かつてバブル崩壊時に他愛ない小さな誤報により、中央区日本橋の某信託銀行があわや取付け騒ぎに見舞われ、預金者が払出しに長蛇の列を作った事例（僅か午前中の二時間で混乱は収拾した。）があったが、執政責任者の失言は慎むべきである。

このことから、図らずも金融恐慌について私なりに学習の動機付けとなった。銀行がその日の手形交換尻りが決済不能となった場合とか、特定の銀行に絞って払出しに応ずる銀行に営業時間も午前のみに特定され、払出し額も一人五〇〇円以内とされた。こうした場合、預金者が長蛇の列をなすパニック状態（俗に取付け騒ぎと称された。）は容易に想像できる。銀行局も各行店舗の手持ち残金の報告を受けながら造幣局へは緊急増刷を指示した。

こうした中で他から資金注入を受けられず閉店し、預金者が払い戻しを受けられなくなる事態（モノトリアム＝（支払猶予令の発動）に陥った状態には「金融恐慌」へ発展する。昭和恐慌の勃発の直接原因は、一九二三(大正十二)年九月一日関東地方を襲ったマグニチュード七・九の大震災であった。

この震災復興のための救済策として発行された震災手形の処理を巡って問題をこじらせたことが発端となり、遅れていた金融制度を直撃した。このことが一九二七（昭和二）年に銀行取り付け騒ぎに発展した。これがかつてない金融恐慌が勃発、昭和大不況の引金となった。間接原因は金融当局者の情勢判断の把握が拙劣で、些細な失敗や勘違いによったこと、市民の反響を見ながら「日銀特別融通法案」を閣議に諮るにつき、知識と経験の無さを露呈したこと等から正に人災であった。この経験が教訓となり今日に至っているが、同じ轍を踏んでいないことが我が国の健在たる証しである。

その翌年(昭和三年)わが母校三商が開校しているが、恐慌の惨絶さがどれほどのことであったかを身をもって体験した生き証人ＯＢ

は今では少なかろう。ここ千載一遇のチャンスとばかりに質屋が大繁盛したとの逸話も残された。

三　アベグレン氏に学ぶもの

本稿では我が国が「金融恐慌」には至らないことが明確となったので、後段ではリーマンショックをもたらした原因は、過去の教訓を生かせなかったアメリカの経営学、財政学に対する教育システムの未熟、生涯教育の不備にあったことを指摘したい。教育システムが未整備であったことが危機を招いたとすれば人災である。事後ながら『日本の経営』（J・C・アベグレン著）を半世紀早くに学習していたならば予防処置を施せていたのではなかったろうか。

昨年五月二日に米経営学者ジェームス・C・アベグレン氏（八一歳、日本人）が亡くなった。日本ボストン・コンサルティング・グループ会社ＣＥＯを経て、最終歴はアジア・アドバイザリー・サービス会長として三年前の訪日の際、待望の日本国籍が取れたと、無邪気に喜びを露わにしていた。生涯を通じ、日本の経営の「年功序列」「終身雇用」「企業別組合」という「三種の神器」に着目、徹底分析した名著『日本の経営』（昭和三十三年十月ダイヤモンド社・刊）は、私が実務界入りした初年度の新入社員用テキストとして配布された貴重な文献であった。

米国籍を放棄してまで日本人に成りきった話は聞いたことがない。二次大戦後、早期復興に喘ぐ日本はまだ復興途上国で、誰もが世界を制覇している米国の国籍を得たいとの潜在的な願望はあるのではないか。世界の「交番」として一極支配に徹して六十余年を経た今日、サブプライムローンから派生し、複雑な金融商品を製造、証券化し、世界中に売り捌いた結果として、信用収縮が連鎖し資金繰りが悪化した。リーマンショックを招いたことは、紛れもなく人災であった。

このことは、風土・習慣こそ違え、『日本の経営』の長所を早くに学習していたら、今回の危機を回避できたのではなかったか。今更バーナンキが「どうもすみませんでした」と謝罪コメントしたところで、手遅れである。もともと米国民のルーツは敬虔な新教徒であるから、元来は金銭の借入は神に対する冒涜であるとの思想であったに拘わらず、住宅ローンによる不動産取得には何らモラルハザードやリスク管理の認識は失せていた。

『日本の経営』に話を戻すが、アベグレン氏は「三種の神器」の概念が日本特有の文化・制度の中で育まれた産物なのであって、経営のノウハウが遅れているとか誤りであるとは指摘していない。アメリカ式に改善しろとも言っていない。現実に日本企業の国際競争力が向上した実績を見ればわかること。具体的には日本企業が高品質の商品を輸出可能としているのは伝統的なある意味では封建制の名残を引いた制度、文化に支えられてきた経営であった。氏は、米国とは単に経営のポリシーの違いだけと言っているにすぎない。

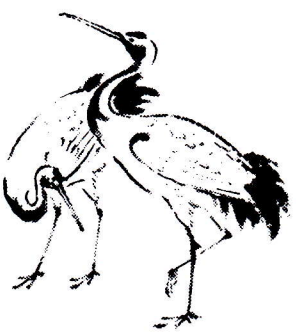
四　米国の再生はあるか

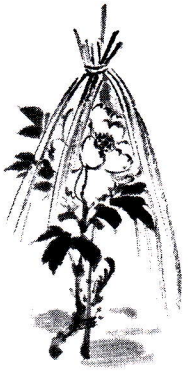
次の新大統領の手腕や資質がどうかに期待する向きもあろうが、教育全般に対する抜本的改革にメスを入れる必要がある。自我の肥大を切除し、賢者と愚者の垣根を撤廃して、「三種の神器」の優れた一部でも模倣してみてはどうか。一方で、わが国でも古来の終身雇用制を廃して、賢者と愚者の要員を篩（ふるい）に掛け、成果主義の礼賛に偏重し、経営効率のアップを経営側に讃美するコンサル業者の出現に加え、転職を勧奨して人件費減を企業に働き掛ける派遣業者の氾濫により、労使関連法規の見直し等、変革も行われてきた。この結果、教育面に見る大きな不備が思わぬ反社会的不幸を生み出しても来たことだ。

幾多の波乱を乗り切ってきた日本企業は、都度、効果測定し、数値達成度をみては継続的に改善し、不適合があれば是正し、再発防止を徹底している。また、このたびの米国発の危機の余震に耐えるだけの底力は持っている。それは先のバブル崩壊時にバランスシートは十分調整を終えていて健全であり、一時停滞して損益計算書がグジャグジャにされただけである。米国はこれらの品質管理には経験不足で教育は大学までに修了。企業は自ら研究開発はせず（政府機関が代行）、総合商社も置かず恒常的な楽観主義のもと、奢りと油断から経済破綻し、景気の底割れを招いたのは、直接的間接的にも人災によるものである。

アベグレン氏に願わくば、名著「日本の経営」を徹底研究した業績に鑑み、一層の生涯教育の推進とＳＯＸ法（二〇〇二年制定の「企業改革法」）を与信して祖国米国の未来構想論としての『米国の経営』を生前に発刊して欲しかったことが心残りである。（完）

参考文献　『金融恐慌・蔵相高橋是清の四四日』（高橋義夫著、ダイヤモンド社・刊）
『信頼を未来へ』（拙著、東京建物・刊）『日経シンポジウム』（二〇〇五・七・一四開催）





第十六回定期総会、懇親会開催される

浅野修一（昭和二十九年卒）

三商会計人会第十六回定期総会、懇親会は、平成二十年六月十八日（水）午後二時より両国の大関庵にて開催された。

出席者は、来賓として東葭時雄先生、柴崎晴雄同窓会会長、会員は好川栄一会長ほか帆足誠、児玉透、増田昌弘、荻野弘康、石川昭、浅野修一である。

東葭時雄先生、柴崎晴雄同窓会会長のご挨拶と同窓会活動状況の報告のあと、荻野弘康会員を議長に選任し議案の審議に入った。

第一号議案　平成十九年度事業報告承認に関する件
第二号議案　平成十九年度収支報告承認に関する件
第三号議案　平成二十年度事業計画承認に関する件
第四号議案　平成二十年度収支予算案承認に関する件
第五号議案　平成二十年役員改選の件

以上全ての議案は承認可決されました。

そのうち平成十九年度収支報告書と平成二十年予算案及び新役員は次のとおりです。

平成１９年度収支報告書
平成19.4.1～20.3.31

収入の部	円
前期繰越金	1,410,929
会費収入	120,000
合計	1,530,929

支出の部	
総会費	36,245
機関誌費	105,840
市民講師補助	100,000
母校80周年記念寄付	50,000
雑費	5,120
次期繰越金	1,233,724
合計	1,530,929

平成２０年度収支予算案
平成20.4.1～21.3.31

収入の部	円
前期繰越金	1,233,724
会費収入	120,000
合計	1,353,724

支出の部	
総会費	50,000
機関誌費	130,000
市民講師補助	100,000
雑費	30,000
予備費	1,043,724
合計	1,353,724

役員

		卒業年
名誉会長	好川榮一	（昭和十二年）
会長	増田昌弘	（昭和二七年）
幹事	蓮見俊太郎	（昭和十四年）
幹事	奥村雅夫	（昭和二二年）
幹事	田代保之	（昭和二三年）
幹事	児玉　透	（昭和二六年）
幹事	柳澤義郎	（昭和二八年）
幹事	淺野修一	（昭和二九年）
幹事	荻野弘康	（昭和三十年）
幹事	久保田光信	（昭和三十年）
幹事	鈴木京二	（昭和三十年）
幹事	高橋俊彦	（昭和三十年）
幹事	吉見善夫	（昭和三一年）
幹事	杉浦康雄	（昭和三二年）
幹事	石川　昭	（昭和三三年）
幹事	金井一夫	（昭和三三年）
幹事	小林康郎	（昭和三四年）
幹事	斎藤恒子	（昭和三四年）
幹事	宮澤正則	（昭和三五年）
幹事	鈴木洋子	（昭和三六年）
幹事	田村都彦	（昭和三六年）
幹事	稲野辺匡利	（昭和四〇年）
監事	帆足　誠	（昭和十七年）

設立以来十六年間、会の発展に功労のあった好川榮一会長がご勇退されましたので増田昌弘会員が新しい会長に選任されました。

定期総会終了後懇親会に入り、全員が所感を表明し和やかに懇談し、定期総会、懇親会ともに終了しました。

母校八十周年記念式典開催される

浅野修一（昭和二十九年卒）

母校八十周年記念式典は、平成二十年一月十二日（土）ティアラ江東にて開催されました。この記念すべき事業の実行委員長は木戸隆吉同窓会会長が担当され、第一部の記念式典、第二部の生徒による舞台発表会、第三部の祝賀パーティとも盛会のうちに行われました。

この行事には、来賓として東京都の関係者、教職員、生徒とともに同窓生も多数参加致しました。当会からも児玉透、荻野弘康、石川昭、浅野修一の四名が参加しこの記念すべき祝典を祝いました。式典次第は次のとおりです。

第一部　式典

第二部　生徒舞台発表

ブラスバンド部及び箏曲部演奏
ダンス部演技
三年五組ソーラン節

第三部　祝賀パーティ

実行委員長、学校長、来賓挨拶
鏡開き、乾杯
歓談（獅子舞い）バンド演奏
ＰＴＡ合唱団
歴代校長挨拶
校歌、応援歌、万歳三唱

以上盛会のうちに終了しました。

三商会計人会事務局

東京都台東区東上野１丁目２４番４号
丸千第二ビル２階　浅野修一事務所内
電　話　０３（３８３５）２２３３番（代表）
ＦＡＸ　０３（３８３２）７１７５番